

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標の達成度	<p>本事業は「聴力障がい児童及び危険地帯に住む健常児童の双方が社会的な偏見、空爆や戦闘による心の傷から自らを守り、PTSD（心的外傷後ストレス障がい）の予防が可能になること。」を上位目標とする3年事業のうちの1年次である。</p> <p>PTSDの予防スキルとは、「どのように心を整理して外へ向かって語り、形にして物語としていくのか」であり、「向き合うため」の環境作りと「受け止めるため」の人材育成が重要である。環境作りとして、集団の場でレクリエーションを交えながら行い、語りやすい雰囲気を作った。人材育成は、現地職員のファシリテーターと研修生が技術を高め、子どもたちの語りを受け止める素地が作られた。</p> <p>このような日々の活動が、昨夏勃発した戦闘後のケアクラスで、特にPTSD予防に奏功した。この戦闘により、重いトラウマを背負う子どもたちも多かった。本事業では停戦直後から「語ること」「それを受け止めること」に専念した結果、停戦後数ヶ月経っても子どもたちが不安定になることはなかった。通常、紛争地域における平均的なPTSDの発症率は10%を超えているが、1年間ケアを受けた112名の子どもたちにおいてはほぼ0%であり、1年次終了時において、PTSD予防を達成することができた。</p>
(2) 事業内容	<p><b>1. 児童への心理社会的ケアの実践</b></p> <p><u>1-1. 心理社会的ケアクラスの運営</u> 7歳から15歳までの国境地帯居住児童と、聴力障がい児童合計120名に対しケアクラスを開催。PTSD予防のスキル獲得を目指した。</p> <p><u>1-2. 聴力障がい児童と危険地帯居住児童(健常児)の交流</u> 被益児童120名が障がいを越えて交流し社会性を育むことを目指し、2週間に1度、2時間の交流クラスを開催した。</p> <p><u>1-3. 夏期キャンプの実施</u> 2014年5月31日～6月5日被益児童120名に対し、市外の余暇施設にて集中ワークショップを開催。普段と異なる環境の中、一層のコミュニケーション能力の増進、PTSD予防能力の向上を目指した。</p> <p><u>1-4. 学校や家族との情報交換</u> ファシリテーターは日々の活動として、子どもたちの生活環境や学校環境の情報収集や関係者と情報交換をし、心のケアに役立てた。</p> <p><b>2. 人材育成</b></p> <p><u>2-1. ファシリテーター養成講座</u> ケア手法の技術移転を目指し、カウンターパートであるエルアマル社会復帰協会(ERS)の教員4名と大学生1名に対し、日本から4度専門家を派遣して講義ならびに実践指導を実施。現地職員5名もこれに参加、能力強化を図った。</p> <p><u>2-2. 海外研修</u> 研修生のうち、1名を日本での研修に招聘する。</p>

<p>(3) 達成された成果</p>	<p><u>直接被益者：117人</u>  ケアクラス・夏季キャンプ 112名（8名は5月に学校を卒業）  ファシリテーター養成講座 5人</p> <p><u>間接被益者：約710人</u>  ケアクラス・キャンプ 112人×5人（家族平均人数）＝560人  養成講座 4人×30人（本事業外の担当生徒数）＝150人  他クラスで心理社会的ケアを実践することで得られると想定。</p> <p><b>1. 児童への心理社会的ケアの実践</b></p> <p><u>1-1. 心理社会的ケアクラスの運営</u>  心理社会的ケアクラスは、各グループ週1回、合計33回実施された。2次現表現の描画から始まり、3次元の粘土細工、4次元の音楽、演劇ワークショップと複雑な表現方法へと展開していった。  クラス開始時（2014年2月）と終了時（2015年2月）にGHQ（一般健康質問紙）テストで心の健康度の比較検討を行ったところ、健康度が有意に上昇していることが認められた。特に聴力障がい児には、高い効果が認められた。（添付書類2,3参照）</p> <p><u>1-2. 聴力障がい児童と危険地帯居住児童(健常児)の交流</u>  合同クラスは隔週1回、合計7回実施された。障がい児と健常児が障がいを超えて対等に接するようになり、子どもたちにより深い思いやりが生まれ、1-1のケアクラスをより効果的に進めるための一助となった。</p> <p><u>1-3. 夏期キャンプの実施</u>  5日間に渡り、集中的にワークショップを行った。キャンプの前後にバウムテストを行った結果、事後テストでは樹木の絵の占有率が13%増加した。子どもたちの変化が多々観察され、心の安定性や内的エネルギーの高まりに、有効に働いていた。（添付書類4参照）</p> <p><u>1-4. 学校や家族との情報交換</u>  学校や家庭から、子どもたちの授業中の態度や家庭での様子に前向きな変化があったと数多く報告を受け、相互に協力しながらケアクラスを行うことができた。（添付書類2参照）</p> <p><b>2. 人材育成</b></p> <p><u>2-1. ファシリテーター養成講座</u>  5人の研修生は講座や実践で学んだ心理社会的ケアの要素を積極的に学校の授業の進め方に取り入れ、子どもたちとの関わりが改善された。最終試験は5人全員が合格。正答率は98%であり、申請時目標を大きく上回って達成した。（添付書類5参照）</p> <p><u>2-2. 海外研修</u>  1年次は戦闘の影響により、実施することができなかった。</p>
--------------------	--

## (4) 持続発展性

地域社会のニーズとの整合性と地域社会の評価

ガザ地区では昨夏の戦闘以降、PTSD が深刻化しており、地域全体が心のケアに注目している。本事業も地域社会から受け入れられ、高く評価された。地元インターネット新聞「ドゥニア・アル・ワタン」からは継続的に取材を受け、これまでに9度ワークショップ内容と本事業の意義が紹介された(添付書類6参照)。2015年2月の1年次終了直後には、PTSDの予防的ケアが革新的だと評価され、事業内容と成果について地元テレビ局からインタビューを受けた。ガザのテレビ局アル・キターブと、パレスチナ政府運営放送局PBCの2局が放映し「地球のステージの提供する心理社会的ケアは今、ガザに最も必要なケアであり、今後もその手法の普及に尽力して欲しい」とのコメントを受け、パレスチナ全土に放映された。

表現活動を通じたケア、作品化する事の意義

表現活動を通じた心のケアは、物作りに長けているガザの人々の心性に合い、導入の時点からすでに多くの関係者に受け入れられていた。この1年を通して、実際のワークショップの様子や成果を関係者に見てもらい、現地のリソース(人・物)でも効果的なワークショップが実施できることが確認された。

更に、ケアの過程で作品を残すという点でも発展性が見込める。子どもたちの作品に触れることで、見た方々は制作した子どもたちの感情と経験に向き合い、ひいては自分の感情と経験に向き合うきっかけと成り得る。辛い経験をした人はそれを心に閉じ込めがちであり、ケアを受けた子どもたちの作品は、このような人々の心に、向き合う勇気を与え、PTSD予防の波及に繋がると期待している。

心理社会的ケア実践者の人材育成

本事業の養成講座で学んだ研修生たちは、心理社会的ケアの根幹である子どもたちとの双方向のコミュニケーション手法が、教育の場でも重要なものであることに気づき、学校の授業に自主的にかつ積極的に取り入れるようになった。それが周囲の先生たちにも影響を及ぼし、広く興味を持たれるようになった。2年次以降もこのように、「心理社会的ケア」の知識が教育現場で広く活用されることで、持続発展性に寄与すると考えている。

今後の取り組み

1年時の成果を踏まえ、2年次以降の事業は、心理社会的ケアの概念を、より広く深く地域社会に根付くための活動を目指していく。具体的には、

1. 作品展示会、映画制作と公開を行い、ケア対象の子どもたちの作品を広く社会に還元し、波及効果を目指す。
2. シンポジウム、心理社会的ケアマニュアル作成を行い、広く社会にこの手法への理解を促す。
3. 養成講座の各講義を公開講座とし、5名の研修生のみならず多くの教育関係者を受け入れ、実践者の育成を強化していく。